

## 全体討議

**鎌田とし子**：桑原先生にお伺いしたいのですが、開拓記念館に保存されている幌内の炭鉱資料は一部なのですか、全部ではないですよね。

**桑原真人**：幌内はわれわれが30年前に調査したときには、まだ炭鉱は閉山していなかったのです。会社側による炭鉱資料の管理が大変厳しいところでありましたから、そのときには、幌内では聞き取り調査が中心だったのです。セツウとタガネを用いてどのように採炭したかというような話ですとか、幌内炭鉱が閉山したのはたしか平成元年でしたね。その後になって、三笠市がこの北炭資料は大変貴重だという話になりまして、廃校になった小学校跡を利用して、最終的にはそこに納めているはずですよ。紋別市の場合は、強制連行の資料が沢山出てきたものですから、在日朝鮮人関係の団体とかそれに関わる色々な人物が本州方面から閲覧に来て、図書館の関係者がパニックになったりしたのです。ですから、同館の場合も朝鮮人労働者の資料も含めて積極的に公開はしていないと思います。

**鎌田**：分かりました。幌内炭鉱の資料につきましてお伺いします。私の仲間の研究者の方で、長く日本大学の教授をしておられた田中直樹さんという方、その方はずっと炭鉱史を研究して来られた方です。北炭で幌内の膨大な炭鉱資料がそのまま眠っているが、これは大変貴重な資料なので散逸してはいけないと、今、先生が言われたのと同じ資料だと思うのですが、廃校になった小学校に全部保管して貰ったと言っておられるのですね。ただし、それらを今後どうするのかということに関しては何も手だてがないのです。今年の3

月で大学を退職されて、今後は福岡県地域史研究所に所属されるそうですが。

**中澤秀雄**：そうすると資料は福岡に行く可能性があるということでしょうか。

**鎌田**：福岡に持って行くのではなく、北海道の資料はやはり北海道に保存するべきであると自分は考えるので、何か良い方法はないのかと。あのままでは廃校になった小学校に埋もれてしまうと、財政的に市の方では手を付けられないであろうと思うので心配でならない。

**桑原**：北炭の資料は、まず本社の資料は北海道大学附属図書館にあります。それから札幌支社の資料は北海道開拓記念館にあるのですね。三笠にあるのは幌内炭鉱という一つの鉱業所ですが、元々は北炭の発祥地みたいな所で、その資料が三笠市にあるのですね。

**鎌田**：そうですね。そのことについてです。

**白戸仁康**：以前、私もお世話になりましたので、最近の様子も含めて分かる範囲で、いま、桑原先生がおっしゃった北炭幌内鉱業所が保有していた文書資料は、ダンボール箱でざっと200~300個以上。桑原先生たちが現地調査した後、閉山後は三笠市により古い校舎で保存され、とにかく仮ナンバーを付けていったようです。そして、桑原先生も一緒だった北海道委託の戦時下朝鮮人調査の折、1996年に私もお世話になりました。保存と言ってもまだ目録もなく、仮ナンバーを付した段ボールを積み上げてる状態の中で、調査に関係がありそうな一部資料を閲覧させて貰いました。そのとき、参考文献目録を内部文書として作成し、それも提出しました。

ところで、1996年に私どもが行ったとき、資料保管場所は最初のところとは違う所で、

すでに資料も移動されていたのです。博物館近くの保育所か何かの跡の建物でした。資料を捜すのも大変でした。そのとき博物館関係者から伺ったのですが、資料の引っ越しを機に、分類整理や目録作りのために地元の人たちをお願いした。しかし、閉山からさほど時間も経ていないし、市内在住関係者の様々な個人情報を含む資料整理を一般の人に依頼するのはまずいのでは、ということで中断した。その間に建物が耐えられなくなり、大急ぎでその場所に移したという、そんな話でした。整理作業も中断したままなので「公開はしていませんが、この度は道の事業なので、あなた方が責任を持つのなら特別に閲覧していいですよ」と調査を許可してくれたのです。

そこで私どもは、調査班でもその事情を説明して、閲覧した資料の所蔵先も非公開としました。北海道の報告書(『北海道と朝鮮人労働者—朝鮮人強制連行実態調査報告書』)は、1999年3月に刊行されましたが、その直後から、幌内関係の膨大な資料があるだろう、研究のため朝鮮人関係の資料を見せて欲しいなど、様々な人や団体から言ってくるようになったようです。こういう資料があるはずだ、道の調査では見せて我々に見せないのはけしからんとか、中には、市民の税金を使っているのだからとか言って、そのうちに現実問題として、資料群がまたも移転したのですね。1996年の段階で新たな保管場所も雨漏りしていましたから、整理が進まないままの移動です。1999年から今年で10年ですが、分類整理や目録化などは進んでいないようです。

この間にも、閲覧要請の催促が何回もきたらしい。三笠ではその度に、なるべく早く整理して、出来るだけ研究者には閲覧を許可したいと返事をしていたらしいのですが、去年も重ねて閲覧の申請書がきたようです。整理するはずだったが、経済的問題など様々な事情から今後の整理の予定も立っていない、まだ閲覧の希望にはお応え出来ませんと回答し

たら、今度は抗議書のようなものが来たとか。三笠市が、閲覧申請がある度に丁寧に非公開の事情を回答してきたのは、市長も教育長も、実際に見に来る人は年間に何人もいないだろうけど、大事な資料だし財産だから何とか地元で保存し整理して公開までもっていきたい、と思ってきたのは事実だからなんですね。現在もそれは変わっていない。何度も資料の移転を繰り返しているけれど、せめて当面は雨ざらしにならないように保管したいと。そういう現地の事情を無視して何とか言ってくる市外の部外者には、乱暴な話になりますが、むしろ丁寧な事情説明の必要もない、ダメなものだ、と、断っても仕方がないと私などは思っています。

**桑原**：朝鮮人労働者に限らず、鉦夫名簿なども個人情報が満載されているから、それを利用するのはともかく、公開の方法は難しいですよ。布施先生の本に個人の名前は出てこないとは思いますが、これからはそういうことは厳しくなってくると思うのですね。

**鎌田**：そうですね。他の調査などでの経験ですが、散逸したり労働組合の資料などだと、すでに無くなったりしてしまっていました。そういうことが起きると困りますから、どなたか責任を持ってやって下さる方がいるのなら安心するわけです。

**白戸**：三笠の現在の市長は、元教育長だった人で、教育長時代に、それらの資料を大切な財産として保存して活用しようとして頑張っていた方です。何とか保存、整理していききたいという気持ちは今でも変わっていないのです。

**鎌田**：ただ、それらを積み上げていても仕方がないから、分類して。

**白戸**：ですから、それをするためには、お金と人手、時間がかかるのです。

**鎌田**：そうですね。

**白戸**：誰にでも整理を頼める資料ではないし、財政的な問題もあって、そのシステムが

なかなか組めない。美唄も同じで、職員の給料もカットする時代ですから。

**鎌田**：殆ど無理なのであろうと危惧しているわけですね。

**白戸**：事情は美唄も同じです。雇用対策事業の二次補正で史料館の資料をデータベース化しますが、中には、10年以上も段ボールに押し込んだままだったのを、ようやく目録化した60箱分の資料もあります。資料を段ボールに詰めてでも、10年、20年でもじっと辛抱強く頑張っておられるしかないのですね、地元で置こうと思うと。

**吉田勲**：赤平の資料については、北海道新聞の記事（平成17年2月16日付）によりますと、戦時動員で道内の炭鉱で働いていた朝鮮半島出身者の帰国者名簿が韓国で見つかったようです。住友赤平炭業所赤平砦のもので、終戦後に作成されたようです。

**鎌田**：わかりました。では結局、幌内炭鉱の場合、今のところは、文書は全然散逸していないわけですね。

**白戸**：していません。完全には言えないかもしれませんが、雨で団子になって、一枚一枚どうにもならなかったものもあるかもしれないし、移動している間に無くなってしまったのも一部にはあるかもしれない、というのはあるでしょうね。ただ、おっしゃるように朝鮮人関係資料などが纏まって無くなった、ということはないと思います。

**桑原**：ですから、北炭本社の書類は特例として、そういったものは公開していないのですね。札幌事務所の書類は開拓記念館で公開しています。

**鎌田**：そうですね。事務所の方は開拓記念館に入っていると、ここに書いてありますね。それ以外のものはどうなったのか。

**白戸**：北大図書館の北炭本社資料は、目録が出来てから一応は公開していると思います。複写などはもちろんダメですが。閲覧についても、現在、北炭本社資料は、あくまでも関

係教授の立ち会いの下に閲覧できることになっていると聞いています。

**鎌田**：やはり北海道に資料を置くべきだと考えておられるのですね。

**桑原**：そういう公文書の書類が残っているのは珍しいと思いますよ。普通は閉山の時に燃やしてしまいますから。記念館に沢山残っているのは非常に珍しいと思います。

**鎌田**：三笠の場合もそのように考えておられる――。

**白戸**：三笠市も、基本的にはそういう考えです。長い間大切に残してきた資料です。道の朝鮮人調査以前にも、道内の色々な研究者や大学関係者など、炭鉱文化史の研究などで活用させてもらった時期もあります。桑原先生の調査の後ですが、あることはあるのです。それならもっと活用し易いようにしようと整理を始めたら、一般の人では個人情報など様々な問題も出てきて、これはまずいと中断しているうちに建物が老朽化したり、私たちの朝鮮人調査後にトラブルが起こったりしたのです。ですから、市の方針が、将来はどうかは分かりませんが、三笠市では、現在も散逸させることは考えていません。

**鎌田**：そうですね。今はそうなっている。資料を整理したり公開したりしたいというところまで、持って行かなくてはならないのだけれど、それをどなたかが責任を持ってやって下さると言うことなら、安心してこれでおまかせと言うことになるのですが。

**白戸**：美唄の郷土史料館にも「石倉新炭鉱関係資料目録」の他に、「旧櫻井家文書資料仮目録」というのがあります。段ボール60箱ぐらゐに、ぐちゃぐちゃに詰め込まれていた文書資料です。ですが、個人情報の固まりなので、なかなか手がつけられず20年間もじっと持っていました。道立文書館で「誰か派遣しましょうか」と言ってくれましたが、美唄側にそれを受け入れるシステムが無い。結局は、その後、地元で細々とアイロンがけなどして、

数年前によく仮目録を作ったという経過があるのです。だから、関係者が何とかしたいと思う気持ちがあっても、なかなか思うようにいかないこともある。三笠市でも何とかしたいと言っているのに、やる気があるのか？と言ったって仕方がないのです。

**鎌田**：三笠市では市がやる気があると言ったわけではないのでないのですよね。

**白戸**：市長も、何とかしたいとずうっと言って来ていて、今後もそうしたいと言っているのです。

**鎌田**：ですから、市にお任せすればよいということでしょうか。

**白戸**：それは、私にはわかりません。三笠市では、大切にしたいと言っているのですから。

**中澤**：この後は、もし可能でしたら個人的にお話をさせていただいて、他にも論点がありますので先に進めさせていただきます。資料を掘り出すと色々なものが飛び出してきて、難しさがよく分かります。他にはいかがですか、それぞれのご報告について。あるいは、すでに整理、保存の話になっているので、空知の炭鉱資料の整備保存ですとか、それをどのように生かしていくのかということについて、ご質問や問題提起、ご意見などがありましたら、ご発言を下さい。

**西城戸誠**：吉田さんの報告の中でDVDでの発表がありました。結構、凝った作りになっていますね。これらはどのように作られたのですか。また、DVDを地元では勿論活用することでしょうが、活用する具体的な方法、どのような場面で活用されているのかを教えてくださいたいのですが。

**吉田**：先程の話にも出ましたが、赤平で80年史を作ったのです。平成15年に新しい市史を作りまして、その中で長年集めてきた資料があるのですが、その写真が膨大に、正確な数は分かりませんが1万枚から2万枚はあると思うのです。その中で100枚程度ということで作ったのですが、今年中に何とか赤間と

豊里、茂尻に作りたいなと思っています。ナレーションについては、住友の分は市の職員の女性にやってもらいました。あとの三炭鉱は、たまたま私の所に滝川西高の放送局の顧問の先生がいらして、炭鉱の話を知りたいということで一緒に生徒を連れて来たのです。それが年明けでしたか。そのなかで、私がそのようなことをやっているということ、先生はご存じだったのでナレーションはどのようにしていますかという話になりました。それで、実はこういう市民サイドで、ボランティアでとお答えすると、是非、うちの生徒にやらせてくれないだろうかと言う話になりました。それでお願いしたところ、非常に上手です。今それを三炭鉱の100枚ずつ、計300枚は作っていますので、それに音楽とナレーションを組み合わせて作成している最中なのです。

**西城戸**：その技術的な部分というのは、その市民の方たちが。

**吉田**：はい。私どもと、チーフになっているのが、お寺の住職さんですね。とても詳しい方です。

**西城戸**：専門の業者ではなく。

**吉田**：はい。一切ありません。全部ボランティアです。炭鉱（やま）の歴史を保存・継承する市民会議でしたが、今は名前を変えてまして赤平映像収集保存会です。

**吉岡宏高**：映像が入ったのですね（笑）。

**吉田**：そうです。ある市民から言われたのです。作るのなら映像をいれなければ駄目だと。素直にわかりました。これからは炭鉱だけではなく、町の移り変わりとか、農業編ですとか、色々なジャンルのものを作ってやっていきたいと思っていますが、何せ、もう70近い私ですから、あまり進んでいないというのが現状です。

**西城戸**：そのDVDなどは学校の教材で。

**吉田**：はい、使っています。赤平今昔物語は図書館からも電話が来ます。それから、あち

らこちらの病院。病院にはもとは炭鉱にいらした方が入院されているらしいのです。それは、札幌の手稲の方の病院でしたが、患者さんに観せるということで、あとは本州の教育団体など、色々なところから要望があります。九州の産炭地区からも問い合わせがありました。私どもとしては100枚~200枚、売れると良いかと思っていたのですが、560枚も売れています。これは材料費も混ぜて中身を言いますと、500枚で100万円ですよ。殆ど材料費に消えました。そのうちの20万円は赤平市に寄贈して、あとの20万円はNPOに。今は新しい物、赤平、住友も売れているのですが、それも全部材料費につき込んでいますね。

吉岡：なんせ、人件費はタダですから（笑）。

中澤：今、映像収集保存会となった市民会議ですが、これはどのような経緯で出来たのか、補足説明をお願い致します。

吉田：市民会議は平成11年度の5月に出来たのですが、その前から色々な、炭鉱資料何とかと沢山の名前があったのですが、全然機能していなかったのです。そのなかで平成6年に赤平炭鉱が閉山になって、先程の美唄もそうでしたが、資料が段ボールに入ったままで、誰も触らないのです。自治体の職員なんて分からないので、触れないですから。それをどうするのかというのを私も市長さんに言っていたのですが、まずそこからやらないとダメだと。それで市民会議を発足させて、ではどれからやるのだということの話し合いをするために平成11年度の5月に出来上がったのです。

中澤：ではその段ボールを開梱して、整理するという手作業も視野には入っているのですか。

吉田：はい。一部は市史編纂をした人たちが整理しました。（資料は）今は閉館している文化会館にあるのですが、その中で、ある程度大まかには分けました。赤平炭鉱の2階にある事務所に棚を作って、我々が閉山した時の

各課の資料は全部、棚に置いてありました。それは、将来はやらなければいけないなと思っていましたから、ある程度の区分けをしておきました。さっきお話しした平成16年です。整理するというのは大変な作業です。はっきり言えるのは、中身が分からないと出来ないです。市役所の職員にやれと言っても絶対出来ないです。見たってわからないです。保安が何か、掘進が何かなんて分からない。昔の事は分かりませんよ、若い人はね。昔の人は親にも聞いているから、ある程度は分かりますが、今の若い職員の人は分からないですから。

中澤：先程、桑原先生が文章と機械類、考古学的な資料と生の声をそれぞれ組み合わせることが必要だご指摘されましたが、まさにその通りでやはり技術を分かっている人が、その三つをミックスするということが出来ると整理も理想的なのであろうと。そういう方法でされたということですか。

吉田：そうです。

中澤：機械類というか、物質的な収集物が先に来た。そして、文書や生の声みたいなものも既に視野には入っていたということですか。

吉田：入っていました。

中澤：では、それをどういう形で赤平市として生かしていくのか、あるいは、次の世代に残していく、どういう意図で引き継いでいくのかということついて、どのような議論がありましたか。

吉田：議論は赤平市、町として、石炭で70年間、石炭産業を支えて来たのだから、大義名分といいますか、これを継承していくというのが、これをどうするのか今後についてはそこまで煮詰めてはいないです。まあ、今やれるものはやりましょうということで、平成15年に鉱山国際会議がありました。そのときはみんなさかんに色々一生懸命やったのですが、終わったらバタッとやらなくなった、

正直言って、それではいけないのですが、まあ、出来ることは少しずつやろうというところまでしかいっていないのです。でも、平成15年にその一つの会議がありましたから、起爆剤といますか、ある程度は先程報告したように出来ました。それとみなさんの産炭地では新しい建物を造って、そこに資料館が入っていますが赤平には無いのです。貧乏なので出来ないのです。もし、それを造ったとしても、それを箱物として管理しなければならぬ。人を配置しないとならぬ、じゃあこの財源はどこから出すの。こういう議論を引き続きやりました。私はやめたほうが良いと。市長はいつかなくなる、代わるのだと、次の市長がどうなるのか分からないのだからと。それで、既存のものを利用していこうということが大前提で進んでいます。

**中澤**：お話を伺いながら美唄との比較みたいなものを考えていたのですが、赤平の場合は最近まで操業していたという、そのポイントが大きくて、美唄の場合は早い段階で止めてしまったので、資料がどのくらい生の形で残っているのかという度合いが違ったのだらうと思います。ただ、一方美唄の場合は40年、50年と、資料保存の歴史を積み重ねてきていて、そこで谷や、盛り上がりなど経験をされているのだらうけれど、赤平の場合には取りあえず炭鉱学会を目指して、上り坂でやってきたと。そこでちょっと息切れしてきたあと、どうするのかという課題に直面している、資料保存のライフサイクルみたいな流れになってきているのでしょう。もし、美唄から赤平へのメッセージなどがあれば、

**白戸**：また水掛け論のようになるので、あまりお話したくないのですが、先程、美唄の記憶再生塾が空知支庁のお声がかかりで出来た話をしました。そして出来たら、今度は資料の集積や調査を超えて、活動がいきなり町づくりみたいな話にまでいっちゃう。文化・歴史的施設などは観光資源でもあり、活用は大い

に結構。けれども、ずっとやってきた私たちから見ると、残っている建物の写真や昔の写真と並べて、昔はこうでしたなどと簡便にマップを作ったりインターネットで発信して、それが何になるのか。つまり目的は何なのか、それが気になってしまう。史料館では資料を貸し出すし、様々な活動に情報などの提供もする。炭鉱に関する研究のある程度の蓄積もあるわけですが、それらの孫引きはいいとして、よく見ると風説・俗説まで入っている。それをインターネットで公開して、好評だとか実績だとかいうのは如何なものか。本来、資料収集や調査などというのは時間のかかる地味な仕事です。一方、観光目的であっても、資料活用には一定の科学性が必要です。三井の場合はこうになっているが三菱との違いはこうですか、地理的な違いや時代背景、企業の方針の違いがあったからこうなってますとかの整理がないまま、相手によってですが、懐古主義的に、ただ写真などを並べて実績と考えるのは如何なものか。これは美唄のことですよ。そう、思っているのです。

現地見学も同じです。レジユメのあとに、三菱を中心とした簡単なフィールドワーク資料を添付しました（「全国交流会 in 北海道：フィールドワークコース案内」）。先程朝鮮人の話が出ましたが、何年前か、朝鮮人強制連行に関する全国的な集会在札幌であり、参加者一行が炭鉱地帯を廻りたいと美唄にもバス2～3台で来て、そのとき使ったものです。参加者には目的意識はあるが、予備知識があるわけではない。こちらも当然、それに合わせて、少なくとも美唄や三菱地区の歴史的背景、堅坑地区を選んだ理由、巻き揚げ機や通洞坑口の持つ意味合いの参考になることなど、目的意識に合わせて事前に配布しておいたものです。ところが記憶塾で頼まれた人の話では、ツアーの手引きもシナリオや資料もなく、バスツアーが何時から何時まで美唄に行きます、何人頼みますと。どうしよう、人

がない。それで、手すきの者や、炭鉱が専門ではない郷土史研究会の会員が出かけたりする。行ってみたら2～3人が乗っていて、何で来たのかが分からない。中には炭鉱や石炭の予備知識が全くない人も乗っていて、「何も無いんだね」と言うから、「建物が沢山あって、ここから上流だけで3万人も住んでいたんだよ」と話したりして、それが一体何なのか。つまり、様々な活動はいいけれども、目的や対象が不可欠です。インターネットのHPも本を一冊書くのと一緒で、DVDも同じですよ。決して、赤平のDVDのことを言っているわけではありません。急いで実績を上げることが目的化すると、その辺が難しいと。

**中澤：**そうですね。40年の歴史がある中で、重みのある発言だったと思います。今、お話しを聞きながら美唄、赤平と夕張は今置かれている立場、勿論両方とも財政危機と言われているようですが、切羽詰まった状況というのが少し違うのかもしれないね。先程お話し頂いたように美唄としては、元々農村として始まったという歴史があり、炭鉱というのは言わば一過性のものであった。まあ、一過性というには重すぎるのかもしれませんが。炭鉱が来る前の人口から始まって、また、そこに戻っていくという意味では、少なくとも炭鉱だけで出来た社会ではないと言う状況。ところが、夕張は炭鉱に非常に依存していて、もしそれが無くなったら本当にどうなるのだという状況があるなか、人口も高齢化していくなかで、最近になって産業遺産やヘリテージ・ツーリズムみたいな考え方が出来てきて、それで人が呼べるかもしれない。そのような希望が出てきた、その人が呼べると言う部分でまず、結論の方から先にそのような話になっていってしまうということだと思のです。しかし、美唄にその話を持って行くと、それこそ美唄はいい迷惑で、50年間ゆっくりやってきたのに、人が来るかもしれないと結論だけをもってこられても美唄には迷惑なだけで、プラス

にはならない話になってしまう。そのようなことで最近流行のヘリテージ・ツーリズムを、天下り式にやることの危険みたいなことが、地理的条件の違いと言う形で現れてきたのかなと。ですから、これをどう生かすのかという話に繋がっていきますが、こうやって炭鉱の資料を保存しよう、いながら整理保存していこうという人たちがここに集まっているわけですよ。その志は同じなのだけれども、先行する美唄からの教訓としては、それをどう生かすのかということも考えないと道を間違える可能性がある。私たち世代としても今後とも考えていくとともに、アドバイスを頂きたいと思っています。他の件はいかがでしょうか。

**小内純子：**札幌学院大学の小内です。資料収集ではなく、現状の維持についてお伺いしたいのですが。たまたま、このアルテピアッツァ美唄のNPO法人に関わっている知り合いがいます。どのように収入を得て、どうやって維持しているのかということを知ったことがあります。特に赤平の歴史資料館のほうは、出来上がったものを維持していくのに、人の配置ですとか、資料だって埃をかぶってしまったりするわけですよ。維持していくための収入ですとか、運営をどのようにされているのか、お話しをお聞かせ下さい。

**吉田：**赤平の場合は全部ボランティアです。炭鉱保存会のメンバーが集まって、春には資料館内部を掃除します。当年度の計画の打ち合わせや秋冬に備えて雪対策などを会員で話し合います。

**小内：**資料館は訪問も出来るのですか。

**吉田：**出来ます。窓口は赤平市の教育委員会です。

**小内：**誰かがいて、説明して下さるわけではないのですね。

**吉田：**そうですね。赤平教育委員会に申し込むと、連絡が来て誰かがそこに行って、開館して順番に説明をするということなのですね。今のところはそうですが、将来はそれではダ

メです。学校の施設を使っていますから教室はあるのです。そこで勉強するところを設けないとダメなのです。例えば、高校生でも大学生でも夏に赤平に来て貰って、そこで赤平の色々な昔の話を聞きながら、そこで勉強する。資料は見せられるのがまだ、ありますから。それらも整備をしながらやっていかないと、最後まで辿り着かない、何年かかるのか分からない訳ですから、今それをやっているところなのです。

**小内：**私はスウェーデンに行っていたのですが、博物館を地域で残そうというときに、ここでは船を残そう、そのために博物館を作ろうということで始まったのですが、会員をたくさん募ってその年会費みたいなもので維持したり、夏はサマーカフェを開いて儲けたりして、経費を得ていました。そういうように赤平の歴史資料館も、もと赤平に住んでいた方の賛同を得てやるというのは、なかなか難しいのでしょうか。

**吉田：**難しくはないと思いますがそこまでじつは頭が廻らないのが正直なところですよ。ですから今日の前にあるものを、いかにするかということで一杯一杯なのです。本来はそうあるべきだとは思いますが。

**小内：**わかりました。

**白戸：**先程アルテピアッツアの話も出ましたので、分かる範囲で。公的施設の運営については二つの方法があるんですね。「地方自治法」の改正で、2003年に指定管理者制度というのが出来て、公の施設の管理・運営を他の団体に代行させることができる制度です。民間の知恵を借り活性化させるのが建前ですけども、運営費と職員数の削減が本音でしょうね。直営でやると、人件費が高くなりますから。例えば年間運営費が1千万円かかるとしますね。そこで人件費分をいくらか削って、600万円ですべてで運営出来ないのだろうか、やれるところがあったら手を挙げて下さい。審査の結果「はい、当選しました」、それ

を市議会が承認して、その団体が運営する。これが指定管理者制度です。ご存じでしょうが、美唄だけではなく、今はどこでもどんどん増えている。アルテピアッツアの場合も、指定管理者制度によって「NPO法人アルテピアッツアびばい」が市議会の承認を経て契約し、そこが運営しているんです。一方、NPO法人というのは、また別の法律（「特定非営利活動促進法」）による非営利団体ですね。定款があって、一定の事業が出来ます。ご参考までにアルテピアッツアのパンフレットをお配りしました。NPO法人として、このようにサポート会員を募って、NPO法人の存続・活動のための収入を得ることもできる。施設内のカフェで、コーヒーを売ることもできる。そのような団体です。そこが市と契約して運営しているんです。

もう一つの方法は従来からの直営で、郷土史料館の方は今のところ市の直営です。人件費をどんどん削減していっても、運営経費が年間仮に500万円かかるとしますね。この金額でどこか希望はありませんか、と、呼びかけても手を挙げるところが無かったら契約は出来ない。別にNPO法人でなくてもいいので、赤平の皆さんのように、ある団体が、我々がやりますと手を挙げるところができれば審査して、市議会承認されたら指定管理者として指名されます。契約した団体が、自分のところは特別の収入が無くても、ボランティアなどを使って市との契約予算で十分に運営できますと言ったら可能なのです。

**小内：**市からお金の入る仕組みは、こちらにはあるのですか。

**白戸：**指定管理者制度は、従来の業務委託とは異なり、一定の団体に運営全般を任せるとして行政処分なので、契約により市から運営のため一定の金が出ます。ただ、建物は市の財産ですので、運営とは別に建物のメンテナンスは市が行っています。

**中澤：**少し違う話になるのかもしれませんが



が、郷土資料館のようなところが移管できない理由の一つは、熟練がとても必要だということ。資料の整理を40年、50年とそれこそ積み重ねながら、色々なものカテゴリーの仕方や、扱い方が見えてくるのだと思いますね。

**白戸**：郷土史料館は指定管理者制度には馴染まない、と私も言っているのですが、実は美唄の場合は、博物館法に基づかない史料館なのです。博物館法では学芸員など最低7人の職員が必要ですが、美唄は先程も触れたように準ずる施設です。どうにか鳴り物入りで開館したのですが、行政は、職員を最小限にとどめるシステムにしたわけです。館長は本務だったり兼務だったり、そして学芸員も置かず。当初は専任の市職員もいましたが次第に減らされて、あとは嘱託職員として学校退職者や臨時の事務担当者などを一定期間ずつ採用しながら、今日まで来ました。私は長い期間、非常勤の主任専門員というのをやっていたのですが、他の仕事と兼務ですので最後まで無給嘱託発令でした。ほかに協力員の力も借りながらです。やがて兼務館長が常態化し、有給嘱託や臨時職員も2人になってしまいました。市全体の人件費削減の結果です。とうとう2009年の11月からは冬期間は休館です。美唄の場合は、ただいまのような綺麗な話ともまた違うのです。

**中澤**：炭鉱資料の場合は、白戸先生や桑原先生のように経験を積み重ねた方が、給料のある無し、は別にして、とにかく、いらっしゃるから、そういう方に指揮をとって頂ければ何とかなるのですが、問題は20年、30年後に若い世代が何かをしなればいけないという場合に、そういうトレーニングの部分が全然継承されていない。その部分をお金が無いなりに組み立てていくのが、課題だとは思いますが。

**吉田**：その部分が一番大事だと私も思っています。ですから、赤平を例にとっても我々の

ような年代がまだ元気な内に、若い人たちにきちんと継承していかないとダメだろうと、個人的にもいつも思っているのです。どういう組織になるのかは別にして、各産炭地がその町だけでやってもなかなか出来ませんから、その全体を見る。ローカルばかりではなく、まあグローバルまでいかないにしても、少し大きなローカルでやっていかないと駄目なのではないでしょうか。また、地元に残っている、炭鉱で働いていた人をもう少し掘り起こして、その人たちの知恵を借りる。先程の話ではありませんが余計なものをあまり見せると、あれを見てきた、こうだったと。それでは駄目な訳で、ある程度口が堅い人を選ぶ必要があります。そこを選別するのは難しいのです。どうしても、「おれ、あそこで見てきたら、すごいあったさ」と、こういう話になっていくので、1が2に、次には2が4になってしまう、これが駄目なのです。きちんとやっていかないと、と思います。その組織とか何か、吉岡先生はいつもやっていますが、これをしないと皆さんが心配された資料の分散や、三笠の話ではありませんが、幾春別小学校にあったものがどこかの体育館に行った、体育館からどこかの集会所に行ったとか、こういう風になってしまうのです。言葉は悪いですが、運んでいる内にトラックから落ちちゃっているかもしれない。こういうこともあり得るのかもしれない。そこはきちっとした人がいないと駄目なのだと思います。それらを含めてちゃんとしていかないと、せっかくの北海道の貴重な財産が紛失していきますから、今が一番大事なのです。誰がやるのかは、分からないですが。

**吉岡**：札幌国際大学の吉岡です。私は北炭幌内炭鉱の出身で、桑原先生が幌内炭に調査に来られた時の炭鉱側の担当者の一人が、当時、労務課にいた私の父だったようです。そのため、我が家には開拓記念館の報文がありました。「座右の書」とまではいかないのですが、

何度も読み返したものです。私の卒論は「戦後北炭経営史」なのですが、経営と炭住とを絡めて分析しようという発想は、まさにあの報文があったおかげです。父は北炭幌内鉱に入る前は泊村の茅沼炭鉱にいましたし、母は夕張の北炭平和鉱出身で、私自身も大学に入るまで幌内で育ちました。私の世代としては、一番炭鉱と関わりがあった立場にいたのではないのでしょうか。今日頂いた目録なども素晴らしい資料ですし、白戸先生が出された北海道の捕虜収容所の本も、今までは局所的な記述は史料の中に見られましたが、一覧できる形でまとめられたご労作であると思っています。

私は、地域振興の視点として、質クオリティ(Q)×量ボリューム(V)ということを常々申し上げています。高さがQ、底辺がVという三角形のイメージです。高いQがあっても、それを理解してくれる人のVが少ないと、三角形はポキッと折れるような脆弱な構図となります。一方で、Qが確保されない限り、Vは増えません。Q×Vの適正点はどこにあるのかについて、客観的な解答がある訳ではないので、そこが難しいところです。

これまで、多くの空知産炭自治体では、脱炭鉱を目指してきました。その結果、美唄は大丈夫なのかもしれませんが、夕張も三笠も歌志内も赤平も芦別も、財政的に危機的な状況に陥っています。空知の地域外からは、炭鉱によって街ができたのだから、炭鉱がなくなったら街も終わったらどうかというような声すら聞こえてきています。それに対抗するには、日本や北海道にとって、いかに空知の産炭地域が街として残るに足る大切な地域だということを訴え続けなければなりません。それは、過去に役立ってきたというだけでなく、未来の日本の姿を投影している先行事例という意味からも、価値をアピールしなければ地域存立の意義を理解してもらえないと考えています。例えば、今の空知産炭地域の

高齢化率は、札幌の30年後の姿にほかなりません。

このように地域の存続が危ぶまれている中で、「炭鉱の記憶」を使って活路を見出そうと、空知支庁で構想をまとめているところです。色々な地域に様々な方がいて、地域によって様々な事情がある中で、広域の構想をまとめるというのは大変難しい作業です。構想について、今朝か昨日の北海道新聞の朝刊に記事が掲載されましたが、観光という表現が色濃くなっていて、あまりに構想の本旨からピントの外れた内容であったものですから、単なる観光ルートを作るというように誤解されかねません。

要は、先ほども言ったように、Q×Vが最大になるようにして地域全体のパイを増やし、空知産炭地域が生き残ることができる状態を具体化しようということに、構想の狙いがあります。その時に、「炭鉱の記憶」というのは、地域にとって大切な手がかかりであるということ、多くの人に理解してもらう必要があります。それには、日本の未来にとって、空知産炭地域がどのような貢献ができるのかということ、打ち出さなければ、多くの人の理解を得ることはできないと思っていますし、実際にこれからの日本の進路にとって、まだ色々な教訓を残していけるのではないのかと思っています。

先ほど、個々でやっても成功はあり得ないという話が出ていました。例えば、三笠で資料整理が出来るのかということ、今の状態では出来ないのですよ。誰かに資金や労力・知識などを助けてもらわないと出来ない訳ですが、三笠で何かアクションを起こさない限り、助けようという動きは出てきません。まさに「鶏が先か、卵が先か」という、膠着状態に陥っているのです。資料が整理されているから、みんな関心を持ってくれるし、関心と呼ぶから整理する助力を得ることができる。この膠着状態を、どこかでぶった切るために、まず

は実践を始めなければ、状況は何も変わりません。

空知支庁の政策や動きに関しては、それぞれの立場や考えがあると思います。私も、空知支庁の美唄に対するアプローチについては、行政特有の制約や考え方から、まずい局面も多々あったのではないかと思います。ただ、今日お話しいただいた赤平の吉田さんも、空知支庁からの「やりましょう」という一声が無かったら、吉田さんたちの活動は無かったし、2004年の国際鉱山会議は赤平で開催されなかったのです。わらしべ長者ではないですが、まずは新しい現実を作ってゆかないと、膠着状態から脱却することはできないし、次への選択肢も生まれてきません。

ただ、白戸先生が憂慮されているのは、とにかく現実を重ねていくだけで良いのかということだと思います。やはり、ある方向性とか信念といったものがが必要です。方向性を示す光明に相当するのが、いま空知支庁で策定している政策です。そして、それを下支えし裏打ちしてくれるのが、こういったアーカイブズだと思うのです。

私の専門である地域振興という観点から言うと、やるべきことを全て決めて、それを着々と実行するという方式は、時代や経済社会の環境が変わった今では通用しません。何をすべきか、すべきではないかということは、日々変わるもので、ある方向性と価値観に照らし合わせて、瞬時の判断が求められる時代になりました。地域外の人に関心を持ってもらう時なのか、足元の資料をしっかり参照すべき時なのか…というのは、その時の様々な状況で判断が変わってきます。しかし、カメレオンのように状況適合だけを追求すれば良いというのではなく、ある方向の先に灯る光明に向かって歩むための道筋とならなければなりません。その価値観と意志、そして意識を集中する注目点を、しっかり示そうということ、空知支庁の政策として打ち出そうとして

いるのです。私自身、空知産炭地域の出身者の一人として、自分の人生との関係も含めて、是非、具体的な動きを起こしたいと思っています。

その時に、やはり困っているのは、このような動きを下支えする役割を担うアーカイブズです。個々の地域で頑張っているのだけれども、専門的な知見などで、もう少し外の方に応援して頂かないと、具体的な形にはならないと危惧しています。いま、地域で頑張っている方がどんどん高齢化していますが、地域の若い人は今のところ関心を持っていません。ですから、外の人にある時期は手伝って頂きながら、少しずつ形を示して、地域の若い人が関心を持つような現実を作っていく必要があります。そのような意味から、このプロジェクトに非常に期待をしています。そのベースとなるのは、今まで着々とやってこられた、みなさんの成果だと思います。

今、空知産炭地域では、とにかく資料がどんどん捨てられている状況にあります。公開までいくかどうかは分かりませんが、ともかく捨てられる恐れがある資料を、何とか1カ所に集める、アーカイブズセンターのようなものは是非とも必要でしょう。まずは確保を優先して、先ほど白戸先生が「20年かかりました」とおっしゃっていましたが、20年かかるのか30年かかるのかわかりませんが、少しずつでもいいから表に出していけるような体制を作る必要性を感じています。これは行政の責任ではないかと北海道や市町村に言っても、今の行政の価値観や体制・財政状況では、お金は出てきません。でも誰かがやらないと、30年後に「しまった、あの時にやっていたら」と言っても遅い訳です。そこをどう突破していくのか、少なくとも行政が関与するためには、政策上の位置づけが不可欠ですから、まずは空知支庁の戦略の中には明確に位置づけておく…といったように、色々なところで手を尽くしているのが現状です。

最後に、つい最近起きた例をご紹介します。かつて北星コンサルタントにあった北炭の地質資料は、会社が倒産した時に引き揚げて、夕張で保管していました。道路の付け替え工事に伴って保管場所を壊すことになったのですが、夕張市役所から工事の通知があったのが解体の3日前なのです。それで、うちのNPOで学生バイトを雇って夕張在住のメンバーが何とか運び出して、全部は無理でしたが重要な資料は何とか残せました。それが今では、夕張市が採掘権を持っている鉱区で、石炭の露天掘りをしたいという業者が何社か現れてきており、施業のためには我々が確保した資料が不可欠となっています。あの時は「こんなもの要らない」と言っていたのに、状況が変わればコロッと一変する。まさに、世の中は足元しか見ないのが現実ですが、でもそのような状況の中でも何かアクションを起こして進めていかないと進みません。

立場の違いがあるのは当然ですが、ある価値観を持って新しい現実を進めていかなければならない。今回のプロジェクトは、その動きの底辺を支えて頂けるものと期待しています。地域の人たちに、自分たちはいかに素晴らしいものを持っているのか分ってもらうには、ちょっとしたショックも必要です。だからウェールズを呼んできたり、ドイツを呼んできたりして、刺激を与えなければならない局面もあります。一回や二回の刺激では、なかなか動かないのですが、何もやらないと何も動きません。このような状況にあるということと、どんな考えで進めているのかということだけは、皆さんにお伝えしたいと思います。

中澤：今日のような会合が成立したというのは、そんなに頻繁にあることではないと思うのです。世代的に、ふた瘤みたいになってまして、かつて炭鉱に関わってこられた方々、あ、間の方もいらっしゃいますが(笑)。それ

と、30代を中心として、工業、産業とは全く縁のなかった方々、こういう構造になっていると思うのですね。この30代の人たちというのは炭鉱というのは過去の問題だと思ってしまうわけですが、その世代が興味を持つきっかけとして、産業遺産というのは非常に意味があるというのは間違いがないですね。実際に私もこういう勉強をするようになって、若手の大学院生を探すと少しは、いるのです。そういう側面から関心を持ち始める大学院生が、軍艦島だとか、そういうところから入る、遺跡や廃墟マニア的なところから。そこから聴き取りなどを始めて、そこから少しずつ離陸していくということがあり、強制連行の話にもぶつかっていく。それを突破口にして白戸先生のやってこられた、正統派の資料の蓄積というところに最終的には結び付けていけると良いのかなと。大学院生たちは軍艦島などを語る時に、日本の近代化を支えた遺産という言い方をするし、軍艦島のツアーをする人たちも実際には炭鉱に関わっていないくて、てっとり早く説明するために日本の産業化を支えた遺産だという一言で済ましてしまう。そうするとそれは大いにナショナリズムに結びついてしまっていて、強制連行の問題もどこかにいってしまうということがあると思うのです。その点から言うと北海道というのは非常によく出来ていて、きちんと資料を残してきてくれているし、そこでまだ働いている人たちがいる。だから、単に近代化を支えたという一言ではとても済まされない、色々な表と裏、プラス、マイナスがあって、それが口伝で伝わってきているという状況が、北海道にはとりあえずある。これは非常に貴重なことなので、これを絶やしてはいけない。文書も口述も、産業考古学の部分も含めたトータルとして、かつてこういう世界があって、それが良いことも、悪いことも含めて今我々がいる時点で繋がっているということ、我々30代の世代が今度は何とか繋

いでいくということをしなければいけない。そのようなことで今回、こういう場を持たせて頂きまして、保存、活用ということで、一筋縄ではいかない色々な論点が出てきました。そういうものも引き受けつつ、我々としても遺産の保存、整理に取り組んでいきたい。そして、皆さまにも色々ご協力をお願いし

たいですし、この場で、またある種のネットワークが出来て、広がったと思いますので、そういう意味で皆さんのお役に立てたとすれば、幸いです。今日はそれぞれご事情もかかえ、お忙しいところをありがとうございます。